

高岡智空

挿絵 / 草上明

2DB
二宮智空のイラスト

性感
淫魔エステ
EROTIC ESTHETIC
BY SUCCUBUS GIRLS
従属リクセーションががです?



試し読み版

プロローグ	予期せぬ再会	006
第一章	運命の再会とエステ見学	011
第二章	夢渡りの香木	066
第三章	夢の淫魔	106
第四章	夢魔の能力	179
第五章	淫魔への道	230
エピローグ	淫魔と、人と	259

登場人物紹介

佐久馬ルミナ

カレンの妹で、姉同様のエステティシャン。珠理とはちょっと陰湿な雰囲気になったことも。

佐久馬カレン

エステティックサロン「MONM」で和希に声をかけ、正妻として添い遂げることになった淫魔。

すどうじゅり
須藤珠理

和希が想っている、人間界で暮らす腐れ縁の女の子。性的なことは苦手……？



ルカ

和希に仕えるスクエアメイド。毒舌がすぎる。



めぐり

MONMで雇われているあかなめ淫魔。



クローディア

MONMのオーナー代行。アルラウネ族。



メア

夢の世界に登場するギャル風女の子。

こしがやかずさ
越谷和希

淫魔好みの精液&勢力を見惚れられ、すっかり肉欲生活。

「それで——この映像はなんですか。完全に盗撮じゃないですかね」

「確かに盗撮ではありませんが、録画機能はなく、外部でこの映像を確認することはできません。あくまでリアルタイムの防犯用カメラですので、どうぞご理解くださいませ」

あくまで笑顔を絶やさずクロードディアが告げれば、めぐりも領いて同意する。

「お客様のことは基本的に信用してるけどさ、色んな方がいらつしやるからね……そういうときの用心はしておかないと。ほら、他のお客様にご迷惑がかかっても大変だし」

「むっ……いや、まあ……確かにそうなんだけど、こういうこともあるとなあ……」

否定しきれない状況に言葉を濁しつつ、チラリと視線を向けるのは、モニターの向こうでルミナに喘がされている珠理の姿だ。こうした姿を別室で監視されているというのは、お客様にとっても愉快な話ではないだろう。

「ああ——ちなみに、この部屋は普段使っていませんからね？」

「は？」

「スタッフ同士の技術講習会なんかでは使いますけど、さすがにお客様を、カメラのある部屋にはお通しできませんからね……今日だけ、そして珠理さんだけの特別です」

カレンがイタズラっぽくそう口にするが、それはそれで大問題ではなからうか。

「い、いやいや、それでもまずいですよ！　こういうのって悪用されたりも——」

「悪用って……こんな風な、エッチな目的でってことかな？」

スルリと近づいてきためぐりがそう囁きながら、手の平をスーツ越しの股間に宛てがっ

てくる。想い人のあられもない姿、喘ぎ声でガチガチに膨らんでいた肉棒は、めぐりの手をグイグイと押し返し、その反動の刺激だけで快感に打ち震えていた。

「あつ、ぐつつ……めぐり、さつ……はあつ、んつつ……」

「うふふつ……悪用だなんて、この淫魔エステにそんなスタツフは一人もおりません。なにしろ女性ばかりですから。ただ、お一人を除きましたは——ね♥」

クローディアもクスクスと笑いながら、腕に抱きつくような格好で密着し、慣れた手つきでズボンを脱がせにかかってくる。ベルトとボタンを外されると、チャックを弾け飛ばさんばかりの勢いでペニスがいきり立ち、ズボンが床に落ちた。勃起の勢いと、漂う濃厚な牡臭に淫魔たちの息遣いが荒くなり、甘い雰囲気オーナールームに広がり始める。

「パンツもパンパンだね……苦しい？ 苦しいよね、和希い……んつ……いますぐ、楽にしてあげるからあ……和希はオカズ見てるだけでいいから、ね？」

「あつ、はああつ……オ、オカズって、なにを……あくつ、ううつつ！ くはあつ、はあつ……めぐりさん、まだ……仕事中、なのにい……おおつ、ほおおつ……」

二人の指が協力するように下着のゴムを広げ、たちまち股間が曝けだされた。すっきり淫水焼けした赤黒い肉棒を、淫魔たちのうっとりとした視線が舐め回し、細くしなやかな指でスリスリと撫で回してくる。もつともらしい理由で拒絶の言葉を口にしつつも、その甘美な刺激にまるで抵抗できない和希の耳元に、柔らかな笑い声が響いた。

「あらあら、いやですわ、和希さまったら……とぼけられては困ります♥ ほら、モニタ

ーをご覧くださいませ……和希さんの大好きなオカズが、映っていらっしやいますよ？」
ああ、やつぱり——そういう意味だとは思っていたが、和希の強すぎる牡本能は、それから目を背けるのではなく、凝視するほうを選ばせてくる。

(くっ、うううっ……すまん、珠理いつ……お、おおおっ……)

モニターの中、的確ながらも気持ちよすぎる淫魔のマッサージを受けた珠理は、すでにバスローブも脱がされており、バスタオル一枚を腰に引っかけているだけだった。ほぼ全裸と呼んでも差し支えない想い人が、遥かに年下——に見える少女に弄ばれ、ベッドの上でビクビクと悶える姿など、どんなアダルトビデオよりも興奮させられてしまう。

『まっ……はっ、あっ……んううっ……待って、ちよ、きゆう……けっ、ええっ……』
『ダメダメ〜♪ このまま最後までやるから、汗と一緒に身体の中がデトックスされるんだよ……は〜い、ヌルヌル〜♥ おねーさん、お肌キレーだよねえ？』

言葉では制止を訴えるものの、珠理は本気で抵抗するようなことはなかった。もちろん乳房の先端や熱くなつた割れ目など、肝心な部分はルミナがノータッチなため、暴れることを躊躇^{ため}わせてもいるのだらう。いずれにせよ、ルミナやこの店のスタッフたちは誰もが一流のフィンガーテクを持ち合わせているため、このように正しい施術を行うだけで、男女問わず性的興奮を促されてしまうのだ。

性に疎い、そうした行為を嫌う珠理が相手でもそれは変わらず、抵抗しようという思考すら奪われた珠理は、ルミナの指が肌を這うたび、タオルをかけられたお尻を大きく浮か

せ、ビクッビクッとはしたなく震えさせられている。いまだはつきりと見たことのない彼女の裸体が跳ね震える、その光景をモニター越しに見せつけられた和希の股間は、すでに先端から透明の牡汁を滲ませ、弾けんばかりに激しく躍動を繰り返していた。

「そんなに夢中になって……珠理さんのエッチな声、お気に召したみたいですねえ？」

「わかつていたことではありませんけど、こうして見せつけられちゃいますと……わたくしたちも、嫉妬させられてしまいます。本当に、罪作りなお方なのですから♥」

モニターを食い入るように見つめていた和希の左右から、カレンとクローディアが隙間なく密着し、腕を豊乳で挟み扱う。柔らかな乳房がシャツ越しに擦れてくる、それだけの刺激だというのに、まるで肉棒を激しく擦られているかのような、蠱惑的な快楽が腕を逆り、腰がガクガクと激しく跳ね躍った。それに合わせて揺れるペニスを押さえるように、カレンたちの滑らかな手が左右から掴み、互いの指を絡ませ、緩やかに抜き始める。

「それでは——和希さんもすっかりその気になられたようですし、珠理さんをオカズにシコシコ……始めてしまいませんか？ とつても、とおうつても気持ちのいいお射精……エッチなお顔と一緒に、私たちの前に晒してくださいね♪」

「わたくしたちの手は、オナホールだと思って好きに使ってくださいませ。勝手に動くオナホールですけれど……和希さまも腰を振って、欲望の滾りをぶつけてくださいませ構いませんので♥ さ、遠慮なさらず……気持ちよく、パンパンなさってください♥」

耳の形をなぞるように舌がくねり、唾液を浴びせるピチャピチャという音とともに、熱

い吐息の感触が耳朶をしゃぶり立ててくる。外周をなぞり終えると、いよいよ本丸を狙わんとばかり、舌先がツプリと耳穴へ突き立てられた。ヌルついた粘膜と唇の熱い感触を浴びせられ、それだけでも射精しそうな官能が脳を舐め蕩かすというのに、囁かれる卑猥な誘惑の言葉が、握り締められた肉棒をその手の中でドクドクと脈打たせる。

「あはっ……チンポ、すっごく元気に跳ねちゃってますよ、和希さん？　これ、どうされますか？　んちゅ、れろおお……私たちにチンシコ、してほしいですかあ？」

「それともお……んじゅっ、じゅるるっ、べえろおお……ちゅばっ、ぶちゅうう……んっふふふ♥　自分で腰振って、情けなくいオナニー姿を披露してしまわれませんかあ？」

囁きながら、二人の指は息びったりで上下へ動き、手汗と先走りの混ざり合った潤滑油を絡めて、クチュクチュと淫猥な音を響かせた。女性器と寸分違わないとさえ感じさせられる、温かく蕩けた手と指の感触——けれど動く範囲はあまりに狭く、それが和希の返事を催促していることは明らかだった。

(こっ……おっ、おおっっ！　こん、なのっ……我慢、できるかよおっ……)

快感に潤みきった瞳は大きく見開かれ、モニター向こうでルミナに喘がされている珠理の痴態を、凝視しっぱなしである。ペニスに奔る刺激と相まって、まるで自分が彼女をバツクから貫いているかのような、牡欲を満たす快感が下腹部を疼かせてたまらなかつた。

「うぐっっ……くっ、はあっ、あっっ……あはああっっ、はううっっっ！」

その疼きを一刻も早く解き放ちたい、そんな猥欲に突き動かされ、両腕を拘束された和

希は、三人の淫魔たちの目の前で、腰振りオナニーを始めてしまう。美女二人の手を使うという贅沢なオナニーだが、セックスを求めてもおかしくない状況でこうした行為に興じるというのは、あまりに惨めで恥ずかしい振舞いである。

「あらあら♥ チンシコされるより、手マ○コオナニーのほうが捗っちゃうんですねえ……まあ、好きな相手のエッチな姿でオナれる機会なんて、そうありませんものねえ？」

「好きに使えるお口も、オマ○コも……ケツマ○コも用意されていますのに、オナニーするほうがお気に召すだなんて……ご自分のお部屋で、アダルトビデオを使って何度もシコっていた頃を思いだしてしまわれたのでしょうか？ 恥ずかしいお方ですこと♥」

それをわかってか、彼女はクスクスと嘲るような笑いを耳元へ響かせ、左右から手を伸ばし、和希の乳首を優しく振り上げた。同時に耳穴を舌でグチュグチュと掻き回され、熱々の口腔に耳朶を吸り上げられ、迸る快感に視界がチカチカと明滅する。

それでも腰の動きは止まらず、膝が震えるせいで情けなくしか動かせないものの、必死で二人の手の平を犯し、大量の先走りを床に撒き散らしてしまっていた。

「もったいないですよ、和希さん……もつと勢いよく腰を振らないと、先走りピュッピュが珠理さんに届きませんかよ？ 現実では手のだせないお相手なんですから、せめて妄想と映像にくらいぶっかけられてはいかがです？ ほらほら、頑張ってくださいいな！」

「ううつつ、ふううつつ……珠理に、ぶっかけえつつ……くうつつ、はああつつ！」

カレンの声に煽られるように、和希は乳首を捻られて喘ぎながら、さらに激しく腰をカ

クカクと躍らせる。モニターに向かつて懸命に腰を突きだし、先走りを勢いよく飛ばしてペニスを突きだし、指の感触を堪能する。包皮が剥き戻しされるたび、様々な汁気の混ざった手筒内はグチュグチュと音を立ててヌルつき、極上の快楽を肉棒に流し込んだ。

「んふう……和希さまの熱いの、どんどん膨らんでくるのが感じられますう……もつともつと、トロットロにして扱きやすくしてあげましょうか……はい、ドロ〜ツ♥」

アルラウネであるクローディアの手から、手汗ばかりでなく、自由に分泌できる花の蜜までが滲み出る。媚薬、精力増強の効果まである成分は粘膜から染み込み、全身から汗が出るほどに和希の身体を火照らせていた。その熱さに鞭打たれ、和希の腰振りはさらに激しく、そしてみつもなくなっていく。

「ふぐつつ、んんんううつ！ やばつ、これええ……はああつ、止まんねえつ……」

「そんなに息切らしちゃって、本当に恥ずかしいんだからっ……そんな和希には、もつとお仕置きしてあげないとだよねえ？ ふつ、ふふふつ……あはあつ♥」

首筋をチロチロと舐め回しながらも黙っていためぐりも、いよいよ我慢の限界を迎えたらしい。和希の身体に背中から密着し、撫で回しながら、フリフリと情けなく揺すられる尻房に両手を宛てがうと、その奥に潜んだ牡急所を目指して大きく割り開いた。

「くうあああつつ!! め、めぐりさんつ、なにっ、し……ひつつ、んんんううつ!!」

「なにつて、決まってるじゃない……和希の可愛いアナルマ○コちゃんは、あかなめにとつては最高のご馳走なんだから♪ たっぷり苛めてあげるから覚悟してなさいよ、この…

…盗撮映像でオナニーする、最低変態マゾ♥」

愛を告白するような甘い声で罵倒しながら、あかなめの唾液でヌルついた太い舌先が、快楽にヒクつき続けていた菊穴を、強引にこじ開ける。排泄口を抉られる、男であれば経験するわけもない挿入される感覚だが、和希にとっては激しい快楽をもたらさず、慣れ親しんだ性行為の一種だ。めぐりの舌、クローディアの蔦、ルカの触手に佐久馬姉妹の尻尾——それ以外にも多くの淫魔の指を咥え込み、そのたびに必ず絶頂を味わうまで掻き回された不浄の穴は、ペニスに勝るとも劣らぬ最高の快楽壺となっている。

「おつむううつつ……んぐじゅつ、じゅぶじゅぶつ、じゅつるううつつ……ぐぼつ、んぼおおつ……あむつ、ちゅばああつ……和希のお尻、やつぱりおいしい♥」

「やつ、めえつつ……ひやつ、ひやべ、りゅ、なあつ……あひいいつつ！」

媚薬唾液をたつぷりと絡めた舌がくねり、菊肉を抉って激しく挿入されるたび、頭の天辺まで一気に快楽電流が走り抜けた。それに加えて、彼女の声を振動で伝えられるたび、震える舌が最大の急所を痺れさせ、蕩けさせてくる。

長い舌がどれだけくねり、尻穴を捲り返して挿入されようと、舌の一部は前立腺へ密着したまま離れようとしない。彼女の声が舌を震えさせるたび、前立腺は捏ね繰り回されているような刺激を味わわれ、射精の衝動が肉棒の中心をグイグイと上り詰めてくる。睨丸もこれ以上はないほどに持ち上がり、先走りは噴水のように噴き溢れ、モニターは瞬く間にテカテカに濡れ汚されてしまっていた。

「ふぐつつ、おつ、ほおおおつつ……あおつ、出るつつ、くううつつ!!」

「あらあ？ おだしになるのですか、和希さまあ……腰へこ始めて、まだ数分ほどですのに……セックスは少しお強くなつたとお伺いしておりますが、責められると途端に、ダメになつてしまわれるんですね。手や足やお尻でされるほうが、簡単にお射精を導かれてしまうだなんて……本当に、根っからのドマゾ体質なのですね、和希さまは♥」

クローディアに揶揄されるが、それでも腰遣いは止まるどころか加速する始末だ。腰を引くたびにめぐりの舌が深く咥え込まれ、精液の塊が秒速で押し上げられるのがわかる。それに合わせて股間が突きだされると、キツく狭まった二人分の指が包皮を剥き上げ、敏感な亀頭をこれでもかというほど、激しく磨き擦った。

「はあおおおつつ！ おうつ、おつつ……おおつつ、だめええ……ふぐううつつ!!」

「んちゅううつつ……じゅちゅるつ、じゅぶるうう……んっふふ、和希つてばあ……そんなに私に犯されたいんだ♪ あかなめのケツマゾになつちやつたら、大変だよお……ま、そうなつたら一生、私が飼つてあげるから安心しなよ……べろおつ、じゅばあ……」

切なさが駆け抜けるその刺激にペニスにはジンジンと熱く痺れ、それから逃れるように腰を引けば、また尻奥がめぐりに犯される。前立腺を擦られ、尻穴を好き放題に抉られる快感に腰が跳ねると、二人の淫魔の指オナホによってペニスが蹂躪される——その繰り返しだった。二人から与えられる人外の快楽に魅入られ、和希は蕩けきった顔で腰を振り、肉棒を抜き続けてしまう。その様子を観察し、乳首や耳をたっぷりと愛撫しながら、カレン

は囁きによって、和希の意識をモニターの向こう側へと向けさせていた。

「珠理さん、とつても気持ちよさそうですね……あんなに腰を浮かせて、シーツをクシャクシャに握って……まるでセックス中、っていう顔になっちゃってますよ!」

「や、やめっ……うくっ、あああっ……そんな、言い方あ……じゅ、りい……」

愛らしく喘ぎ、それを堪えようとしている仕草の一つ一つが艶めかしく、和希の興奮を煽ってペニスを脈打たせる。浮いた腰には頼りなくバスタオルが引つかかるばかりで、ここには彼女のたっぷりとした尻肉が密着し、形を浮かび上がらせ、和希を誘惑するように振り乱されていた。思わず生唾を飲んで、食い入るように見つめる視線は、彼女の尻房と顔、そしてベッドに押し潰れる豊乳を凝視し、興奮はさらに煽られていく。

「ふふっ、ガチガチに勃起されていますね、和希さま……想い人の嬌態だなんていう、最高のオカズを前にしては無理からぬことですけれど。さ、このまま気持ちよく果ててしましましょう……わたくしたちの手オナホを、珠理さんのオマ○コだと思つて……♥」

アルラウネの花蜜とサキュバスの汗、それらがグチャグチャ、ニチャニチャと音を立てて糸を引き、脈動する肉棒を抜き、欲望のおもらしを促していた。尻房に顔を埋めるために抱きついたためぐりの手は、せり上がった睾丸を柔らかく掴み、肉棒のほうから垂れ落ちた蜜汁を絡め、それを塗り込むように揉み擦ってくる。

「んうっ、ぶじゅっ、じゅるううっ……んおっ、ほやああ……ぶじゅっ、じゅばああっ……んっ、ほらあっっ♪ イッチャお、和希い……好きな人をオカズにする、最低のオ

ナニーで気持ちよくなりなよっ……モニター越しに、ドロドロにしちゃいなよっ♥」

グツグツと煮立つほどに熟成された新しい精液が、弄ばれる刺激に合わせて押し込まれ、肉棒を込み上げるのがわかる。それに合わせて舌圧が前立腺をギュツギュツとマッサージし、閉じようとする尻穴は無理やりこじ開けられ、括約筋が射精を堪えようとすることすら許してくれない。純粋な慕情を白濁で汚すようにと、三人の淫魔が囁き促す言葉に逆らえず、和希は腰を浮かせるようにして、勢いよく股間を前へ突きだした。

「あつぐううつつ！ はあつ、あつつ……イツ、くううつ……出るっ、出るううつつ！」

ズリユンツツ——と包皮を完全に剥き下ろされながら、二人の指の隙間から肉棒が飛びだし、尿道口を限界以上まで大きく割り開く。抵抗を失い、緩んだ尿道を濃厚な牡欲が駆け上がっていく快感に脳が痺れ、足腰が蕩けきったように崩れ落ちそうだった。それを抱えて支えるめぐりが、舌腹で螺旋を描くように前立腺を押し捏ね、精液を後押しする。

「はあつ、あはああ……和希さんの、濃ゆいザーメンの匂いい……いやらしい青臭さ、ここまで漂ってきてますよお……出ますか、出ちゃうんですかあ？」

「出ちゃいますよね、和希さまあ……ご自分で仰いましたものねえ？ いいですよ、だして……いっぱいお射精してください、モニターに無駄撃ち射精つつ♥」

尿道口から白濁が覗くほどまで込み上げた瞬間、淫魔たちがたつぷりの唾液を耳に舐りつけ、これでもかと射精を誘ってきた。滴った媚薬唾液は、そのまま彼女らの乳谷間にまで流れ込んで、シャツ越しの和希の腕をヌルヌルと愛撫してくる。その先端——指先は二

人の股間に挟み込まれ、柔らかな太ももと熱い淫肉の刺激が、和希の指を牡肉のようにしやぶり立て、クチュクチュと音を立てて扱いた。

（だっつ……あああつっ、だめっ、だあああつ……いぐつつっ、くううつつっ!!）

カリツと耳朶を甘噛みされ、少し強めに睾丸を揉み捏ねられる——その瞬間、背筋が痺れるほどの快楽が走り抜け、和希の目の前が真っ白に染め上げられる。

——ドピユドピユドピユウウウ~~~~~~~~ツツ！ ビュルビュルツツ、ドビユツツ、ドビユルツツツ、ビユクビユクビユクウツツ！ ビユツプウウウ~~~~~~~~ツツツ！

「んっ……あつ、はあつ……出ちゃいましたね、和希さん……すごい量ですよ♥」

「ふふっ、モニターが真っ白……珠理さんの顔、隠れてしまったではありませんか♥」

魂が抜け落ちでもしたような蕩けきった顔で、爪先をピンと伸ばして腰を突きだした和希は、もはや動けなくなっていた。一本に繋がっているかと思えるほどに濃厚な白濁が快感とともに噴き上がった、心地よすぎる射精の快楽に意識は奪われ、視界さえ真っ白に染め上げられ、腰は反射でガクンガクンと小刻みに震えるばかり。

「あらあ？ 和希さん、動きが止まってますよ……最後の一滴まできちんと搾らないと、恥ずかしい腰へコオナニーやめさせませんからねえ？ ほら、へ〜コヘコト」

「ほおっ、おっ、はあつ……あがつ、あつっ……はあつっ、うううつつっ！」

「ふふっ、聞こえていないようですね……それでは仕方ありません、わたくしたちでお手伝いいたしましょうか。射精直後の敏感チンポ、シコシコさせていただきますので♥」

カレンとクローディアが嬉しそうに挿入しながら、動きの止まってしまった和希に代わり、肉棒の根元に残った精液をコシユコシユと扱き搾ってゆく。

「ふぐうつつ?! んあつつ、あはああつつ! はひつつ、ひいひいつつ!」

過敏な亀頭をグチャグチャと捏ね擦られ、くすぐったさと切なさの入り混じった快楽とともに、残っていた白濁が勢いよく噴きだした。思わず腰を引いて逃れようとするが、尻穴を貪る淫魔がそれを許さず、唇に真空を作るほどの激しい吸いつきで尻穴を吸り、前立腺を貫いて、無理やり股間を前へ——二人の淫魔の手オナホの中へ突きださせる。

「んぶじゅうつつ……じゅれるおおつ、んれるおおつつ……ほらほらあ、もつと出るでしよ……こんな恥ずかしいオナニーする機会、滅多にないんだからさあ♪」

「めぐりさんの仰る通りです……このたっぷりのお射精は、和希さまが珠理さまを想って吐きだされたものなのですよ? 想い人でシコりまくったとご自分に言い聞かせ、最後まで情けなくピュッピュされませんか♥」

クローディアがクスクスと笑い、濃厚精液を指に搦め捕ってグチュグチュと握り潰し、自らの蜜汁と絡めて卑猥な潤滑油を作りだしながら、そう甘く囁いた。指摘にゾクリと背中が震え、珠理で自慰行為をしたという罪悪感を強く抱かされながら、興奮はいやが上にも高められていく。そんな状態で二人の手から扱かれ、さらに前立腺を絶え間なく刺激されては、射精を堪えることなどできるはずもない。

「はあつつ、あああつつ、出るつつ……イクツツ、またイクうつつつ!」



ここは夢の世界、夢魔が神様になれる空間だ。メアが指を鳴らした瞬間、ベッドの四方から伸びた鎖と枷が、和希の四肢を繋ぎ留め、仰向けに引きずり倒される。

「和希っつ……きゃっつ?! な、なによこれっつ……開けてっ、開けなさいよっ!」

珠理のほうは、ガラスでできた鳥籠のようなケージに閉じ込められ、一瞬にして天井へ吊るし上げられていた。大声を響かせる珠理だったが、その声はボリュームを絞られたように小さくなり、囁く程度の音量でしか、和希の耳には届かなくなる。

「珠理ちゃんはおもしろっただけ待ってね? 最初はエサにするだけのつもりだったんだけど……珠理ちゃんも珠理ちゃんでも可愛いから、気に入っちゃったんだよね。メインを食べたあとのデザートっついで、和希くんの次にトロトロにしたげる♥」

「俺が本命っついでかよっ……珠理を使って、俺を誘い込むつもりだったのかっ?!」
すでに誘い込まれた状態で指摘するのも滑稽だが、メアはそれを馬鹿にした様子もなく、むしろ嬉しそうに微笑んで頷いた。

「ま、そんなとこよ。珠理ちゃんの心が虜になってたら、現実でもあーしの操り人形になるし? 色仕掛けで和希くんを釣って、いまみたいにする予定だったっついで。ま、ちよっただけ狂っちゃったけど……和希くんが手元にいるなら、結果オーライ!」

予定が狂った——というのは、最後に心を虜にする手順だけが、夢魔の手で行えなかったということだ。それを担うべき立場は和希本人となり、珠理はアロマのおかげで記憶を維持して夢に入り込んで、自分の心と向き合うことができた。二人はほとんど生身の状態で

で身体を重ね、想いを通わせたのである。

「なら、珠理はっ……お前の操り人形になってねえってことだろっ……珠理っ、聞こえてるよなっ！　なんとかして目を覚ませば、ここから逃げられるはずだ！」

「あはっ、無理でっす♥　一度、ここに入ってしまったら最後……あーしの許可がないと、出られませ〜ん♪　夢の中では永遠の時間を愉しめる……精気の吸われすぎで現実の身体が衰弱しちゃうわない限り、半永久的にね。ってことで、時間だけはたっぷりあるから……思いっきり可愛がって、快感で躰けて、心を先にへし折って虜にしてあげる♥」

メアの指がスツと動いた瞬間、和希の服は弾けるように飛び散り、下着を残して瞬く間に剥ぎ取られてしまう。驚いた珠理が慌てて目を覆う、その眼下ではメアが、和希の膨らみきった股間を見てうっつとりと微笑み、自分のスカートをヒラヒラと靡かせた。

「っ……俺を、どうするつもりだよ……」

「言わなくつてもわかってんでしょ？　濃厚でおいしくて、ほとんど無限に湧いてくるエナジーボックスだもん……あーし一人で独占するのはもちろん、その欠片をエサにして、淫魔界をあーしのモンにしちゃう——なんてのもありかなあ？」

クスクスと笑うメアの本音がどこにあるかはわからないが、淫魔界にすら悪意を抱く彼女の言いなりになど、なるわけにはいかない。視線はチラチラと、ムツチリした小麦色の太ももに引かれそうになるが、それを懸命に引き剥がして、和希はメアに言い放つ。

「やれるもんならやってみろっ……けど、俺を虜にするっていうなら、それまで珠理にも

店にも——淫魔界にも手えだすんじゃないわねえ！俺を落とす自信があるならなあ！」

「あはっ♪ すごい、カッコいい♥ まあ最初からそのつもりだったけど、そこまで言うってことはあ……屈服させたら、なんでも言うこと聞いてくれるんだよねえ？」

ギシリ——とマットレスを軋ませ、柔らかなクッションを弾ませ、仰向けに寝そべる和希にメアがのしかかってくる。彼女の身体から、そして吐息から漂う甘い香りに頭をクラクラさせられながら、和希はなんとか頷いた。

「お前の虜にされたら、なんだってやってやるっ……けど、俺だって簡単には——」

「まあ、MONMの連中にイヤってほど調教されてるもんねえ？ ある意味で慣れてるわけだし、自信はあるんだろうけど……それってカンペキ逆効果だよ？ 快感に弱く躓けられちゃった牡なんて、現実での一時間もあれば楽勝で墮としきっちゃえるんだだけ♥」

言いながら、涎をたっぷりと絡めた舌が、形をなぞるように耳朶を一舐めする。その瞬間、肉棒が下着の中でビクビクと躍動し、溢れだした先走りが黒い染みを広げた。濡れた生地はベッタリとペニスに張りつき、その形を血管の筋までくつきりと浮かび上がらせ、和希の激しい興奮を痛いほどに表している。言葉の勢いとは裏腹に早くも牝に屈しかけている己の牡欲を恥じ、耳を火照らせる和希を、メアはニヤニヤと嘲笑っていた。

「ほんつと楽勝だよね、和希くんって……ああ、もうたまんない♥ ちょっと早すぎるけどお……ひ・と・く・ち・め♪ 早速もらっちゃおっかなあ？」

嬉しそうな声で囁きながら、少し身体を離れたメアが、顔をゆつくりと下腹部へ近づけ

る。舌先を耳に這わせただけ——それ以外のタッチをまるでされていけないのに、和希の射精欲求は、すでに限界まで吸い上げられていた。それでも簡単にはやられまいと、和希は快感に抗うべく尻穴を窄め、お腹を引き締め、我慢の態勢を整える。けれど——。

「なっ——なに、言ってるの……ねえっ、いまのどういふことっ!! MONMの連中につて……和希、お店の人たちと……したの、そういうことをっ?」

勝負に水を差したのは、天井から微かに響いた珠理の声だった。あっ——と気づいた和希が慌てて言い訳しようとするが、不意に言葉を詰まらされる。その原因であろうメアは、状況を愉しむように嗜虐的に微笑み、吊るされた珠理を振り返った。

「その通り——あの店のスタッフはみくん、牡のザーメンをエサにする悪魔みたいな連中よ。さつきから言ってたでしょ、淫魔っていうんだけどね……ま、そうじゃなかったら渡されたアロマくらいで、あーしの計画が狂うわけないし?」

和希が半裸になっていることも、もはや気にならないといった様子で、珠理は目を見開いている。メアを睨みつつ、けれどその言葉を一言一句聞き逃すまいと、愕然としながらも気持ちを引き締めさせている状態だ。

「で、和希くんはあいつらの大好物——それもとびっきりの上物を、いつくらでもドバドバっって射精できちゃうわけ♥ 最初っからそういう体質だったとこを、さらにたっぷり調教されて……いまじゃすっかり、あいつらのエサ箱状態になっちゃいましたあー♪」

「ウソ……ウソ、だよねっ……和希っ、そうなのっ!!」

「——って言われてるけどお？ 和希くん、なにか反論あったりするう？」

そう微笑みかけられた瞬間、言葉のつかえが一瞬にして外される。

「っつ……珠理、違うっ……その、落ち着いて話を聞いてくれ！ そうしたら——」

「そうしたらわかってもらえるって？ あははっ、無理ムリィ〜♪ なに聞いたって、ドマゾになった彼氏の説明なんて理解できるわけないっての、ねえ？」

挑発するようにメアが珠理を見上げ、その嫉妬と怒りを煽るように和希の肌に指を這わせた。しつとりとした滑らかな指先が乳輪を撫でる、その刺激にハアツと切ないため息がもれ、腰がビクンツと跳ね上がる。和希の反応を見て小さく身震いしたメアは、珠理と向き直るように身体の向きを変え、寝転んだ和希の頭の側へ座り込んだ。

「ほら、なにも違わないってわかったでしょ？ 淫魔に身体中調教されて、敏感な射精奴隷になっちゃったのが、いまの和希くんってわけ——あ、そうだ♥ せっかくだし、どれだけマゾになっちゃったか見せたげよっか？ そうね……あれなんてどう？ 珠理ちゃんも受けたMONMのエステ、あれだけで射精できちゃうってとこ、見せてあげなよ♪」

「え……エステでって、そんな……だって、あれはそういうのと——」

珠理が戸惑ったように声を上げるのも当然だ。確かに際どい所に触れられはしたし、声をもれるほど気持ちよかったものの、大切な場所を弄られたわけではない。男性が射精するのは、局部に——つまりペニスに直接刺激を与えられたときだということくらいは、さすがの珠理も把握している。夢でも経験したことであり、それは間違いない。

だからこそ——エステのマッサージや施術を受けたくらいで、和希がそんなことになるはずはないと珠理は確信していた。これはきつと、このメアとかいう妖魔が自分たちを惑わせるため、つまり虜にするための作戦なのだろうと予想してさえいる。

「そうよ、エステで射精するなんて、普通はあり得ない……ね、和希くん♥ 自分がそんな風になつたんじゃないって証明するなら、耐えるしかないんじゃないのぉ?」

珠理がそんな風に思っているということは、和希も理解できていた。その状況でこんな話を持ちかけられて、断ることなどできるはずがない。そんなことをしては、彼女の言葉——自分が淫魔の調教によって敏感マゾ体質になつたと、肯定するようなものだ。

「く、そつ……好きにすりゃいいだろつ……どうせ、動けないんだからなつ……」
「ふふつ、強がっちゃつてえ——つていうよりか、期待してるつて感じかなあ?」

和希の牡欲を見抜いた妖魔の言葉に、ドキリと鼓動が跳ねる。それと同時に——フワリと靡いたスカートが視界を覆い、レースで飾られた極薄スケスケの黒いショーツが、濃厚な甘い体臭とともに顔へ擦りつけられた。

「んぶつ、ぐつつ……ふぐうつ、んみゆつ……んふうつ、ふうううつつ……」

ムチムチとして張りのある、それでいて絡みつくように柔らかな太ももが顔を挟み、ショーツ越しの尻肉が顔をズシリと押し潰す。魅惑の顔面騎乗——鼻先を包み込むような淫裂の感触とともに、メアの牝性そのものがダイレクトに脳を揺さぶってきた。

(や、べつ……あぐつ、ううううつ!! 淫魔の、匂いいつ……うくううつ……)

嗅ぎ慣れた、甘い牝臭と体臭の混ざり合ったアロマが、鼻腔と肺奥を容易く満たし、脳内にその爪痕を刻んでくる。吸ってはいけなと思うのに、本能を惹きつける牝の気配が理性を蕩かし、深呼吸を強要していた。これは呼吸をするためだ、やむを得ない——そんな言い訳で自分を誤魔化し、グリグリと擦りつけられる淫裂に鼻を埋め、息を吸う。

「んふうっ、すうふうっ……うくっつ、ふっはあああっつ!!」

刹那、頭の奥で快楽が爆発し、視界も思考も眩い閃光に埋め尽くされた。ペニスは下着の中で痛いほどに暴れ、噴き出した先走りのせいで、おもらしたようにビチャビチャに濡れてしまっている。込み上げた精液はペニスの半ばどころか、ほぼ先端にまで達しており、気を緩めれば一瞬にして溢れこぼれてしまうだろう。

「ほら、顔に乗ってあげただけで、このザマ♥ 珠理ちゃんさあ……夢パコしたときの和希くん、ここまで気持ちよくしてあげられたあ？ できてないよねえ？」

その言葉に、自分との行為で和希がどんな態度だったかを思いだしたようだ。終始、珠理を満足させるために技巧を凝らし、ムードを高め、感じさせる努力を重ねていた和希——だがそれは、和希自身を満足させるための行為ではない。

「ア、タシ、はっ……だって、そんな……そんなこと、全然っ……」

「そくそ、珠理ちゃんはなくんにも知らないもんねえ？ だからしょうがない——和希くんを満足させる、ド変態エッチなんてできなくってもいいの♥ その分は、あーしが和希くんのことたっぷり可愛がってあげるからあ……珠理ちゃんはそれを見ながら、あーしが

用意してあげる都合のいい和希くんで、さびしいオナニーしていいよ♥」

自分との技巧の違い、和希への理解の甘さを突きつけられ、珠理は声もだせず、ケージの中で愕然としていた。彼女の声が微かにすら聞こえなくなった、その事実には危機感を覚え、和希は懸命に声をかけようとする。けれど――。

「ふぎゆうっ……ひゅ、ひゅりいつ、ひにつ、ひゅんらあ……あつぐううっ!!」

「あはあっ♥ あーしのオマ○コ、そんなに気に入ったんだあ……ふふっ、かゝわい♪ まあでも、ちよつとだけおとなしくしててもらおうかなあ……まずは和希くんのチンポにも、敗北感を味わってもらわないとだもんねえ?」

言いながら、メアの両手が胸板に触れた瞬間、グチュリと音を響かせ、粘つく濡れた感触が肌を舐め上げた。ローションを絡めた手の平がグチャグチャと音を絡め、女性へそうするように胸全体を柔らかく刺激して、満遍なくほぐしていこうとする動きである。

（ふっ、うう……落ち着け、大丈夫だ……まだ、触られてる、だけっ……っ……）

宣言されていた通り、その手つきはエステ施術やマッサージそのものであり、なんらいやらしい技術ではない。だが、巧みな指技はMONMのスタッツに勝るとも劣らぬ快感をもたらして、触れられてもいない和希の乳首を、たちまち硬く勃起させてきた。

「あゝあ、乳首チンポのほうも勃起しちゃったあ♥ こんな扱いてくさいっつておねだりしてるようなもんだよねえ、クスッ……まあでも、まだお預けだけどねえ?」

顔を見なくてもわかる、ニヤニヤとした笑い声を響かせながら、指先は乳輪のギリギリ

外へ何度も円を描いてくる。反射的に股間が跳ね上がり、見えないなにかを突き上げるようにカクカクと腰が揺れ、濡れた下着に勃起が激しく擦られた。これ以上ないほど射精欲求が刺激され、勝手に準備を整えた足先が、弓なりに反ってピンと張り詰める。

(や、べっつ……こんなところで、暴発なんて……くっつ、おおっつ……ぐっつ!?)

和希の我慢を邪魔するように、彼女の尻肉に体重がかげられ、柔らかな重量感がミッチリと顔を圧迫してきた。息苦しさの中、懸命に吸い上げる酸素にはメアの香りが充満しており、それを啜るたびに鼓動がバクバクと激しくなつて、疼きが股間に収束していく。

「あはっ、感じすぎだし♥ エッチなこと、な〜んにもしてないのにさあ? あ、顔に乗ってるのはちよつとエッチか……でも、普通は苦しいとか、屈辱だとか、そういうことのほうがおつきいよねえ? ド・マ・ゾ・の、変態チンポくんじゃない限りねえ♪」

煽る言葉に被虐欲を刺激され、とうとう足先だけでなく、身体全体が弓なりに反り返つた。肌という肌が過敏に研ぎ澄まされ、触れてくる指の感触が、まるでペニスを舐められているような快楽をもたらしってくる。

(はあっ、ぐっつ……なんだ、これ……マジで、全然っ……勝負に、なんねえっ……)

手の平が胸元を解放し、脇腹を滑つて下腹部へと迫っていくのがわかった。舌で舐め擦るような、ヌラヌラとした刺激が広範囲で身体を撫で擦り、股間へ近づいてくる。快感の期待に腰は浮きつばなしで、その膨らみきつた部分を撫でて欲しいと、媚びせがむようにカクカクとはしたくないお辞儀が繰り返される。けれど、それをフツと鼻でせせら笑いな



ら、彼女の手は膨らんだ下着を迂回し、震える太ももへ進路を定めた。

「言ったでしょ、楽勝で墮としちゃえるって♥ チンポ触るまでもないんだから……珠理ちゃんのマ○コより気持ちいいあーしの手で、たっぷりもらせっ——このマゾ♥」

「んあつつ、あぐつつ、あああああ——つつつ!？」

辛辣な言葉を突き刺されると同時、手の平が太ももを揉みしだき、脚の付け根から十数センチほど滑り降りる——それだけの刺激で、すべての我慢が完全に崩壊させられた。

——ドグドグドグツツツ、ドクンツツツ、ビュルビュルビュルウ~~~~ツツツ!

「ほおあああつつ、あぐつ、あつつ……ひぐつつ、イツ、ぐつつ……おとおおつつ!」

先走りでグチャグチャになっていた下着の中に、新たなヌメリと熱さがブチ撒けられ、不快感と牡臭を溢れさせてゆく。けれど股間を突き抜け、脊髄を駆けて脳天に突き刺さるのは、気が遠くなるほどの凄まじい快感だ。快感に命じられるまま、拘束された身体は鎖を千切らんばかりに反り返って腰を大きく浮かせ、足先は痛いほどにピンと張り詰めていく。射精の脈打ちが心地よければ心地よいほど、下着の中に暴発させられるという最低の無様さを堪能させられ、それを誇示するように足を張って腰を浮かせてしまう。

「はい、おしまい——チンポ触んなくても、一分持たないでしょ? だいつぶ手加減してあげてもこれだからね……オマ○コ必死に使ったって、自分が何回もイカされるだけだった珠理ちゃんとは格が違うの♥ いくら好きな相手でも、気持ちよくしてもらえないんじや意味ないよねえ? 自分の至らなさがわかったかなあ、珠理ちゃん?」

悩むフリをしながら、片方の乳首を触手壺の中で徹底的に苛め抜き、グジュグジュと音を立てて粘液を溢れさせ——中身を蕩けさせた末に、ようやくルミナは口を開いた。

「まあそこまで頼むなら、しようがないけどお……その代わり、さっきのおねだり——もう一回、言ってもらおっかなあ♪ このおねーさんたちの前で、ね♥」

「は——え、な……お、お姉さんって、なに——言っ、て……」

そう言われた和希は、歪みきつていた視界の焦点を合わせ、教室の後方に目をやる。教卓を取り囲む少女たちと対照的に、後ろのほうの席でニヤニヤと笑い、和希の痴態を見物しているのは——メアの夢で和希を弄んだ、クラスメートたちに他ならなかった。

「プッ……年下にもこれって、ほんつと弱いんだ♪」「すげーカッコ、ウケる♪」

「チンポだけじゃなく、乳首もマゾならさあ……チンポ触る必要なかったんじゃない？」
あまりの衝撃に言葉もない和希。その耳元に口寄せたルミナが、そつと囁く。

「これはね、現実のおねーさんたちの誤解をなくすための……あの夢の中に、変な寝方で呼ばれちゃったおねーさんたちは、現実と夢の区別が曖昧になってるんだよね……だからこうして、夜の夢であり得ない状況を見せつけて、夢だって理解してもらおうの♪」

言われてみれば、真実を知ることになるかもしれないしえりは、この場になかった。だがいずれにせよ、その言葉が本当なのかどうか、和希には問い質す余裕もない。ただ、それが牡欲への免罪符となり、理性の鎖は錆び朽ちたようにボロボロと崩れていく。被虐の性癖が勢いよく鎌首をもたげ、年下の少女たちの前、クラスメートたちの前だといふこ

とも気にならず、和希は恥知らずな懇願を、教室中へ響くように叫び上げていた。

「おっ……お願いしますっ、俺のっ……俺の、弄ってもらえなくてっ、おかしくなりそう
なあっ……へ、変態マゾ乳首いっつ！ みんなの手で、苛めてっつ……抓ったり扱いたり、
クチュクチュ押し潰したりしてっ……気持ちよくっつ、してくださいいっつ！」

言い切った瞬間に脳内麻薬が弾け、全身の血流に快感のパルスが迸る。先走りは射精の
ようにドロリと伸びて、前の床や目の前の少女らにビタバタと浴びせかかって、濃厚な粘
液の糸でいくつもの橋をかけていた。

「あっははははは、しんじられな〜い♪」「いやー、さすがに夢だよねー、これは」

「これ現実だったら——本気で越谷のこと、奴隷にしちゃうかも♥」

確かに夢ではある、けれど和希にとってはどこまでもリアルな夢だ。現実で同じ目に遭
っても、間違いなくこれだけの痴態を晒し、恥辱に塗れることは間違いない。それを自覚
するだけでも凄まじい快感が突き抜け、バチバチと視界に火花が散りさえしていた。

その快楽の極みにも近い状況に、嗜虐的に微笑んだ少女たちの指が伸びる。

「この——ヘンタイ乳首♥」「おにーさんって、ほんつと恥ずかしいんだね〜♪」

「でもいいよ、そこまで変態なんだつたらあ——」「私たちで、遊んであげる♥」

明らかに年上だとわかっている男を見つめる瞳は、色を知った女の目だった。愉しく淫
らな玩具を見つけたと悦びを露わにし、少女たちの指が乳輪をなぞり、乳首をゆつくりと
挟み込み——舐めるような柔らかなタッチで、プニプニと揉みしだき始める。

「ふぐつつ、おつ……あつ、はあああ……んっ、おおつ、ほおお……」

焦らされきつた乳首にようやく擦れた刺激が、脳内に大量の快樂成分を分泌させた。感極まった声に涎まで垂らし、陶醉した表情を晒す和希に、少女たちの嘲笑が浴びせられる。

「ふふっ、カッコ悪いお顔〜」「変態のお……乳首マゾの、負・け・顔♥」

嘔き、見つめ、吐息を浴びせ、辛辣に被虐の心を揺さぶるくせに、指先の動きはどこまでも繊細で、慈愛に満ちていた。だが、和希が求めるのはそれではない。待ちに待った刺激は身も心も蕩けるほどに気持ちいいが、強烈な快感に溺れきつた和希の欲望は、どうしようもなくプライドを崩壊させる、未熟な少女たちからの悪意に満ちた性蹂躪だ。

「あひっ、いいいっつ……もっ、ほおっつ……もつと強くううっ！ 痛いくらいっ、グチグチってえっ！ 乳首、グチャグチャにしてくださいっ！ 早くううっ！」

現実の彼女たちが、どれほど性行為に精通しているのかはわからない。だが外見だけは紛れもなく穢れない乙女といった、年下の少女たちへの恥ずかしい懇願——その屈辱的なシチュエーションに先走りが止まらず、ドロドロとペニスに光沢を塗り広げ、周囲の少女たちの制服に汚液の染みを作ってしまう。

「んっもお……おにーさんってば、ルミナの友達にそんな変態おねだりしてえ、ほんつとに恥ずかしいマゾさんだねえ？ おにーさんのお友達も見るのにねえ〜？」

「んっはあああつ、はあつ、あううう……ンなこと、言ってもお……もつと、し、して欲しいんだから、しやうがねえだろおっつ……おほっつ、ほあああつっ！」

懇願に応えた少女たちの指圧が強さを増し、乳首が圧迫されて僅かに潰れた。ビリッと電流にも似た快感が突き刺さり、みっともない喘ぎが次から次へと溢れてしまう。

「はあううっ、んあっ、はあっ！ も、もっと、強くうっ……うああああっつ！」

「はいはい、したげますよー」「乳首射精できるまで、たっつぷりとねえ？」

言われた瞬間、射精を意識した肛門がキチキチと音を立てて引き締まり、またも勢いよく先走りが噴きだした。それでも、前立腺を捏ねられたわけでもない刺激では、射精の後押しにはなり得ず、またも切ない感覚だけが睾丸の奥へ沈められていく。

（はっ、があああっ……ううううっ、チンポおっ……チンポか、前立腺っ……ちよつとでも触ってもらえりや、余裕でっ……イ、イケんのにつ、よおおっつ……）

そんな願いを込めてルミナを見つめるが、返ってくるのは満面の笑みばかり。最初の宣言通り、そして少女たちとの授業のテーマとして、和希が乳首で射精できるまで、本当に乳首しか責めるつもりはないようだ。そして——この長い長い前戯が、すべて二日後に控えるルミナとの子作りのための精液成熟期間なのだとすれば、たとえ乳首だけで達するところができるようになっても、その許可を与えられることはないだろう。

ここが夢の中である以上、和希の射精がルミナに制御されていて不思議ではない。

「ん？ どうしたのかなあ、おにーさあん？ ほらほら、チンポ乳首ちゅぱちゅぱしてあげてるからあ、頑張ってお射精しようよ、ねえ？ ドピュドピュっつて♥」

心を読ませない、無邪気な笑みと言動でルミナが性欲を煽れば、周囲もそれに倣う。

「乳首イキするとこ、見たいなあ〜♪」「ド変態のマゾだったらあ、できるよね？」

「ほらほら、リクエストだよ、越谷あ〜♪」「年下に一方的に負けたら恥だよ♥」

年下の少女たちに笑われ、クラスメートに揶揄され、射精のスイッチだけは絶対に触れてもらえない、残酷極まりない拷問——その時間は、和希が目覚めるまで延々と続き、目覚めてからも解消されることはなかった。



そんな二日間を振り返ると、本当に長かったように感じられる。

夢の中では延々と乳首を舐られ続け、時には耳を舐られながら、全身を唾液塗れにされることもありつつ、けれど射精だけは許してもらえない、まさに性拷問の繰り返し。その感覚は起きている間にもフィードバックし、衣擦れだけで射精してしまいそうになるのを、なんとか我慢しているような有様だった。

そんな和希の牡欲の余波が感じられるのか、店内や屋敷内の淫魔たちは目に見えてムラムラと発情しており、監視の目が緩もうものなら、誰もが和希から精を搾ろうとにじり寄ってくる始末。監視を務めた面々も、カレンですら和希の誘惑に屈しそうになりつつ、鋼のような理性で踏み止まっていたようなものだ。

だが、それもここまで——今日この時、このベッドの上で苦しみから解放される。

「ル、ミナツ……はあつ、はつ、早くっ……うううつ、も、限界っ……」

「ルミナだつてそうだよお、もうっ……こおんなになつてるんだからあ♥」

ベッドへ座り込んだ和希の前に立ち上がったルミナは、自らの淫裂を丁寧に指先で広げ、穢れなく眩いほどに輝いたピンク肉を晒し、潤んだ光沢を見せつけてきた。

透き通るような薄い桃色はテラテラと濡れ光り、濃厚ながらも人の心を惹きつける甘い芳香を放ち、和希の視線を釘づけにする。牡を求めて緩みきった膣口は大きく開き、止めどなく溢れる泉のように愛液を垂れ流して、すでに太ももまでがベツトリと濡れていた。

当然、淫裂全体も淫液に塗れ、蕩けたように緩んだ肉襞が、痙攣を繰り返して蜜汁を跳ね飛ばしている。ピチャリと顔に飛び散る愛液が肌を伝う、そのヌメリにすら興奮を煽られ、和希の肉棒は破裂せんばかりに膨らみ、躍動を繰り返していた。

「ねえ、ルミナのここ、どうかなあ？ キレイ？ チンポ挿れたくなってる？」
「お、おお……挿れたいっ、すぐにいっ……もう、マジで我慢できねえって……」

滴る愛液を啜れば、それだけで射精してしまいそうなほどの興奮が、睾丸の奥でグツグツと煮え滾っている。その興奮の原因となる、まさに蜜壺といった様子の肉穴に鼻を寄せ、ヒクヒクと震わせて彼女の淫臭を堪能しながら、和希は無意識に舌を伸ばす。だが――。

「んっ、はあ……だあめ♥ オマ○コ汁舐めたいのはわかるけどお、そしたらおにーさん、すぐにピュッピュ〜ってしちゃうでしょ？ 今日はあ……せ〜んぶ、こつちにだしてもらうんだからあ♥ 一番奥に届くまで、ちゃ〜んと我慢しなきゃダメだからね〜？」

舌から遠のくように彼女が腰を引き、いやらしいガニ股ポーズを披露しながら、ゆつくりと腰を落とし始めた。全裸でポールダンスをするような卑猥な光景に、和希は血走った

目を全開にさせ、さらに肉棒を硬く張り詰めさせる。肉の軋む音がギチギチと鳴り響き、彼女の体温だけでなく、熱く濡れ蕩けた淫肉の熱さまでが、空気を伝ってペニスに届いた。「ふふっ、すっごい目……見られてるだけで、ルミナもイッチャイそう♥んっ、ああ……ほらあ、入るよお、入っちゃやうよお……んくっつ、くふううんっつ♥」

プチュウツ——と蜜汁の弾けるような音を跳ねさせ、卑猥な肉華が龟头へ口づける。その熱く潤んだ肉襞が擦りつけられた瞬間、和希の背筋がビクンツと震え、腰が大きく跳ね上がった。突き上げられた肉棒は、緩みかけていた肉穴に龟头を食い込ませ、熟れた果実を貫くように、グジュグジュと牝蜜を溢れさせ、その狭い媚道へ飲み込まれていく。

——ジュプチュウウウツ、グチュブツツ……又ジュツツ、ジュツポオオオツ……

「おふっつ、んっつ……くおっ、おっ、おほおお……ほあっ、はああっつ……」

「んあっつ……ひゅ、ごおっ……んくうっ、はいっつて、くりゆう……ふううんっ♥」

二人の切なく震えた喘ぎが同時に響く中、膝をブルブルと痙攣させるルミナの腰は、本当にゆっくりと沈められていった。広がった龟头が押し込まれるや、狭まった肉穴は蕩け崩れたように口を広げられ、肉襞を隙間なくペニスへ吸いつかせる。ヌルついた刺激が肉幹を撫で擦り、龟头を磨き、愛液をたっぷりと塗して、牡肉を最奥へ誘おうとしていた。

(なっ、はあああ……や、ばいっ、やばすぎるうう……も、おおっつ、出るっつ……)

引きずり込まれるような感覚は永遠のように続き、ペニスはビクビクと脈動を繰り返して、熱い蜜壺に埋まっていく。乳首だけを愛撫され、焦らしに焦らされて込み上げっぱな

しになっていた精液は、すでに肉傘の辺りまでせり上がっていた。

彼女の子宮に到達するまで射精はできない——そう思って和希は菌を食い縛り、尻穴を引き締めて抗おうとしていたが、いくら力を込めようと、快楽がそれを緩めさせる。毎秒ごとに嵐のような快感が肉棒を満たし、和希の視界は歪むほどに潤んで、頭の中は真っ白な光で溢れ返っていた。跨がってくる彼女の股下へ投げだした両足はピンと伸び、腰は勝手に浮き上がって、極上の肉穴を迎えに行っている。早く最奥を味わわせてくれ、猛る欲望をそこにすべて吐きださせてくれと、懇願するような身体の反応だ。

「あはあっ……おにーさん、エッチな顔おゝ ほらあ、もう少しい……んっ、はあっ♥」
 上半身を支える腕は、ルミナの脚と同じようにガクガクと震え、快感のあまり身体が崩れ落ちそうになっている。ただし表情は、快楽に悶えつつも余裕の笑みを浮かべている彼女とは対照的に、射精を必死に堪えるみつももない涙目を晒していた。それを見下ろされている状況が性的敗北感をことさらに刺激し、さらなる射精欲求が芽生えさせられる。
 (づっっ……あああああああつっ！ もっ、おおっっ……無理っ、イクううっっ！)

気の遠くなるような感覚が走る——その刹那、プツンと理性が断ち切られたように、全身の力が抜けきった。ペニスの根元もダルダルに緩み、堪えていた反動も相まって、勢いをつけた濃厚な精液が、一気に尿道を込み上げる。

「あっ……ル、ミナッ、あっ……ご、めっ……ああああつっ、許してえええつっ！」
 今日まで必死に我慢し、ルミナの妊娠という大事を控えていながら、最後の我慢をし損

ねてしまった。凄まじい後悔と申し訳なさに思わず涙をこぼし、大声で謝罪しながら、和希は腰を突きだして脚を反らせてしまう。こんな最低な状況にも拘わらず、食欲に快楽を貪ろうとする自身の淫乱さに嫌悪すら覚えながら、それでも解放感を抑えることができない。

「ごめんっ、あああっ、ごめんっ、ごめええんっ！イクツツ、イクううっ！」

泣きじゃくりつつも和希は必死になって腰を浮かせ、込み上げた精液の塊が、容赦なく尿道口をこじ開け、飛びだそうとする——その瞬間。

「あはっ——さいっこお♥おにーさんのその顔、見たかつたんだあ……えいつつ♥」

——プチュウツツ……ビュクツツ、ビュクビュクビュクウウツツ！

「ほごっつ……おぐっつ、んんんううっつ!! くひああああ——つつつ！」

その決壊を待ち望んでいたかのように、彼女の尻房が股間へ叩き落とされ、亀頭の先端がコリコリとしたリング状の肉壁を深く抉った。彼女の最奥に啜え込まれると同時に、フライング気味に飛びだしていた濃厚な牡液は怒濤の勢いで噴き上がり、膣内を白濁に染める。

——ビュググツツ、ビュルビュルビュル……ツツ、ビュグンツツ、ビクビクツツ……ドプツツ、ドビュルウウ……ツツ！ドクツドクツドクウツツ……

「んひゃうううっつ♥ あはあつ、きたつ、きたよおつ……おにーさんの、いつちばんすごいのおっつ……んくっ、くふううんっつ、んあつ、んはああっつ♥」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリッシュノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の
ドキドキ
キアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫